

2025 年度 大竹手すき和紙プロジェクトレポート

【 担当教員 】

学部・学科・専攻	職 名	氏 名
代表者：芸術学部 デザイン工芸学科 漆造形分野	准教授	青木伸介

【 プロジェクトの概要 】

本プロジェクトは、2019年度より「おおたけ手すき和紙保存会」との連携のもと継続している活動である。2024年度の地域展開型芸術プロジェクトにおいては、広島市の「広島広域都市圏地域貢献人材育成事業」の助成を受け、伝統技術の継承活動に加え、学生の芸術活動の一環とした展覧会を行い、その成果を「発信」することに重点をおいて展開した。

大竹手すき和紙は、400年以上の歴史を誇る伝統技術を地域住民が中心となる保存会が今日まで守り伝えてきたものである。楮(コウゾ)の栽培から紙料加工、伝統の「流しすき」に至るまで、その一貫した和紙づくりは、市のコミュニケーション・シンボルマークやPRキャラクターとして扱われている「大竹鯉のぼり」を支え、地域に永らく愛されてきた重要な存在である。しかし、現在は次世代への継承に加え、原材料の確保や和紙の活用方法の模索といった課題に直面している。本プロジェクトでは、和紙の素材や道具、それを扱う技術を地域の風土や人の関わりから再考し、伝統工芸の本質を理解することで、地域との持続可能なつながりを構築し、“対話”と“ものづくり”の機会を創出することを目的とする。

本年度は、技術継承を軸としつつ、芸術学部の専門的な創作の視点から和紙の新たな可能性を探求し、保存会が取り組む商品開発への参画および成果発表を通じて、伝統工芸の理解と発展を試みる。

【プロジェクトでの成果等】

本プロジェクトでは「大竹手すき和紙の伝統技術継承と協働」として、6月から12月にかけて大竹市防鹿の「おおたけ手すき和紙の里」にて複数回に渡り、伝統技術の習得を目的とした実習を実施した。参加者は芸術学部の学生13名（継続2名、新規11名）であり、そのうち7名は「地域実践演習（地域にある工芸の今を考える）」の受講学生である。実習では、おおたけ手すき和紙保存会の森本会長を中心とした会員の指導のもと、和紙の原料となるコウゾの栽培を始め、コウゾの加工、加工後の紙料を使った製紙（溜めすき、流しすき）まで一連の工程を学ぶ実習に取り組んだ。その後、主に上記演習科目の受講生7名の学生を中心に、12月から翌年3月（展示は4月まで）まで成果発表の準備と展示を実施した。本報告では、時系列に沿って活動の詳細と成果について記述する。

① コウゾの栽培管理（芽かき作業）

6月22日（日）

当初予定が大雨により中止となったため、翌週に順延し実施。学生4名に加え、保存会員、一般のボランティア（親子連れ）の総勢20名が参加した。今月、大竹手すき和紙が「広島県伝統的工芸品」に新規指定された。保存会の活動が着実に認知されている。

今年のコウゾ畑は、昨年に比べ生育が芳しくない。地面に近い葉が所々黄変しており、幹も細く高さも70cm程度である。特に古株の畑で顕著であった。脇芽の除去と下草刈りを行なったが、近年の大雨や酷暑の影響が懸念される。



昼食の合間に「コウゾ茶」用の葉の選別と試飲を行なった。癖のないすっきりとした味わいが学生に好評であった。午後は、森本会長より大竹手すき和紙の歴史や工房解説を受けた。



コウゾの脇芽の柔らかい葉から作られたコウゾ茶

保存会会長の森本氏が中心となり指導を行なっている

7月13日(日)

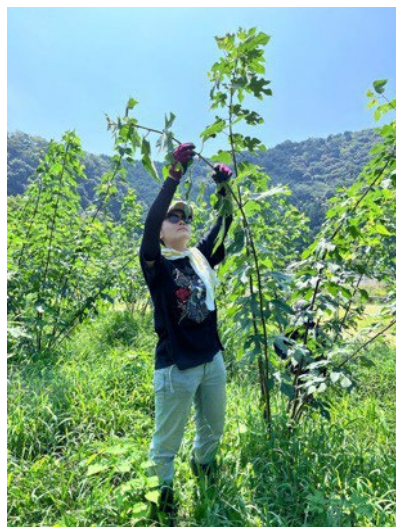
昨年度に新しく植え付けた「穂仁原小学校跡地」の畑を訪問。三ツ石地区の畑と比較して成長が著しく既に背丈を超え大きな葉をつけていた。

午前中に芽かき作業を行い、午後は工房解説およびハガキ用の和紙制作を実施した。



8月26日(火)

今年度は計3回の芽かきに参加。学生が交代で参加することで、保存会の人手不足の解消に寄与した。前回から1ヶ月以上を経てコウゾは幾分成長していたが、穂仁原小学校跡地の生育の差は顕著であった。



(左) 穂仁原小学校跡地のコウゾ (右) 三ツ石地区のコウゾ

② コウゾの加工および溜めすき和紙の製作

8月26日(火)

2024年度に収穫され干して保存していた白皮(皮ハギとソブリがされたもの)を一晩水槽に晒して戻し、苛性ソーダを加えた大釜に入れ煮熟して柔らかくする。繊維の柔らかさを見極める判断が難しく、熟練の技術を要する工程である。煮終わった白皮は再び地下水を満たした水槽で晒し、不純物を取り除くと同時に自然漂白を行なった。その作業と並行して、工房では小舟を使って全懐紙サイズの「溜めすき」を実施。枷といわれる木枠に簀笥を乗せたもので舟の紙液を掬い上げるのだが、相当な重量になるため枚数をすくにも大変な作業である。学生が交代でそれぞれ3枚の和紙を制作した。



保存会で和紙を製作されている竹中氏から実演と指導を受ける

③ 鯉のぼり制作の現場調査

9月20日(日)

手描き鯉のぼりとして知られる「大竹鯉のぼり」唯一の制作者である杉本海氏より、歴史講義と実演指導を受けた。大竹手すき和紙と同じく、6月に「広島県伝統的工芸品」に新規指定されており、貴重な学びの機会となった。全長90cmの小型鯉のぼり(専用の厚みのある丈夫な鯉紙を使用)を制作。氏が制作される中でも小さいサイズのものである。熟練の技術で下書きなく一気に仕上げる工程を見学した後、半身は学生が交代で教わりながら描き上げた。その後、30cmのオリジナル鯉のぼりの制作に取り組んだ。



(左) 杉本氏に教わりながら鯉のぼりに筆を入れる学生



(右) 30cmの鯉のぼりを手にした学生と杉本氏

④ コウゾの刈り取り・皮ハギ・ソブリ

11月8日(土) 12月6日(土) コウゾの刈り取り(収穫)

コウゾの刈り取りは、落葉期(11月～3月)に合わせ、畑を順次回りながら行われる。葉が落ちてから行う理由は、作業がし易いことが大きい。残っている葉があれば手で簡単に落とすことも可能である。樹液がかぶれを起こすこともあるため、服装にも気をつける必要がある。今年も保存会メンバーに加え、ボランティアも多く参加しており、協力して効率的に進めた。収穫量を増やすためには、それに応じて多くの人手が必要になるため、高齢化が進む保存会としても苦慮しているところでもある。

本プロジェクトにおいて、このような体験は制作に必要な素材の根本を考える良い機会となる。



11月30日(日)皮ハギ・ソブリ

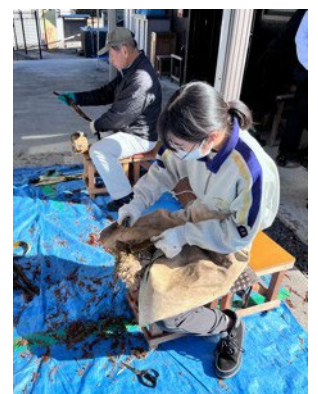
保存会員やボランティアが多く集まる休日に人手が必要な作業を行う。そのため、収穫したコウゾは直ぐに加工せず、乾燥を防ぐために水槽につけておく必要がある。大釜に入る量は1回で150キロであるため、複数回に分けて皮ハギを行なった。今回は学生の参加日程の関係で、一部は簡易版の小規模設備で実施。同時に黒皮を取り除く「ソブリ」の工程も体験した。



(左) 小さな釜を使いコウゾを蒸す



(中) 熱いうちに皮を剥ぐ



(左) 黒皮を専用の包丁でそぶる

⑤ 流しすき和紙の製作実習

11月30日(日)

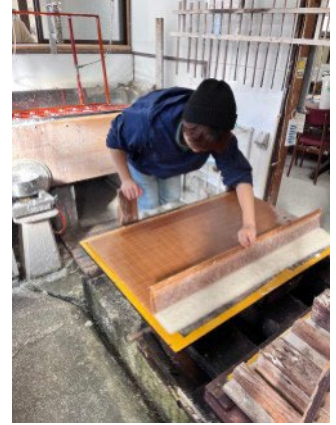
大舟を使用し、伝統的な「流しすき」による和紙の製作実習を行なった。11月の終わりということもあり寒い時期ではあるが、天候に恵まれ比較的暖かな日となった。「流しすき」は、井戸水と紙料にトロアオイの根から抽出した「ネリ」を加えた紙液を、天井から2本の紐で吊った箕桁を乗せた枷で舟から適量掬い上げ、前後に揺すって紙の厚みを均等にする方法で、ネリが入っていることで紙料が水中に分散して浮遊し、枷の上で上手く流れることを利用している。ネリはゲル化した粘液であるが、その効果が得られる条件として気温が関係している。伝統の和紙づくりが冬の農閑期の仕事であった合理性を、身をもって実感することができる。現在は合成ノリを使用され夏場も漉くことが可能であるが、自然と向き合う手仕事の本質を学ぶ機会となった。



(左) 紙液を攪拌する



(中) 大判用の枷を操作する学生



(右) 紙床にすいた和紙を移し重ね置く

⑥ 和紙のグッズ制作

2月(学内活動)

保存会の指導のもとおおたけ手すき和紙の里での継承活動を終え、2月の学内での成果発表会(地域実践演習)、3月の大竹駅自由通路内での展示に向けて、発表準備と大竹手すき和紙を活用したグッズ制作に着手した。現地実習での課題をもとに、地域実践演習を受講する学生7名が取り組んだ。実習で得た経験を、具体的な製品(形)として提示することで、伝統工芸の新たな可能性を模索した。

○コンセプト「織り込む」
・おたけ手すき和紙の長い歴史、そしてそれを守り伝えていこうとする保存会の方々の思いを形に織り込む。

○対象、使用場所
・男女問わず、小学生～以上を想定

○制作物
・ティッシュカバー
・ブックカバー
・鉛筆キャップ
・この他にもコースターやランチョンマットなど様々な物を作ることができる。
・ティッシュカバー (リバーシブル)

・ブックカバー (文庫本サイズ)

コンセプト

折りのカタチ『合掌』
×
平和のモチーフ『ハト』

なぜ「レターセット」なのか

- ・和紙のあたたかい質感を活かせる
- ・年齢・性別・地域を問わず使える
- ・「届ける」行為そのものが広がりになる

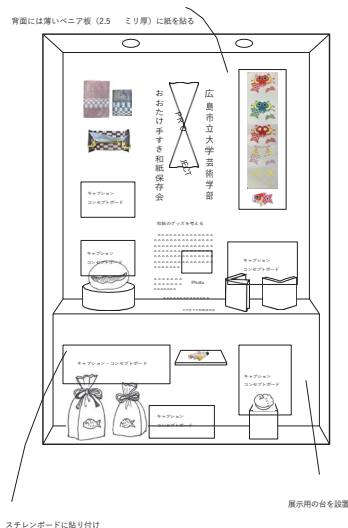
×××と×××に
大竹和紙も
こいのぼりに
届けよう

2月4日の地域実践演習で行われた成果発表会の内容の一部

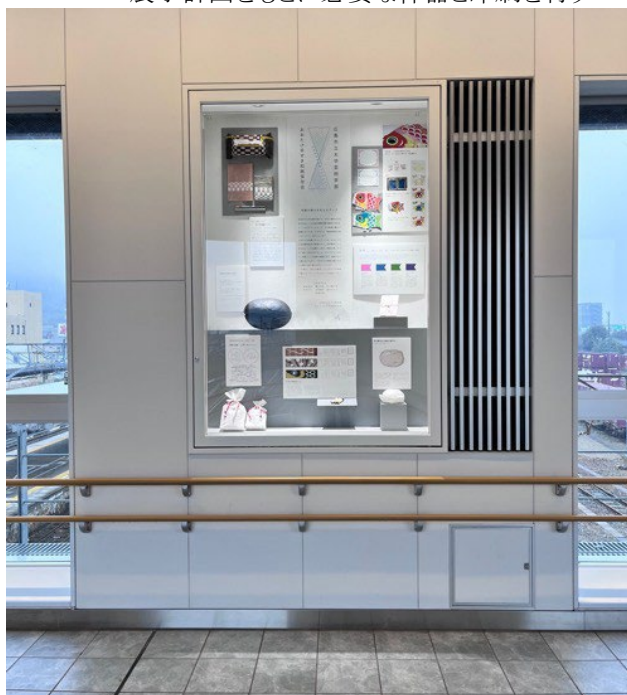
⑦ 大竹駅自由通路内での成果発表

3月6日(金)～4月17日(金)開催

2月に発表した学生の提案をもとに、3月の展示に向けてブラッシュアップを重ね、各々のコンセプトボードやグッズのプロトタイプを保存会が管理運営する大竹駅自由通路内の展示棚に設置。年間に数回の展示入れ替えを行なっているが、今回プロジェクトの一環として保存会より依頼があり、新たな試みとして企画された展示である。限られたスペースを効果的にレイアウトした演出とアイデアに富んだコンセプトと作品が好評を得た。今回の成果が評価され、保存会より次年度も2回の展示依頼を受けている。今後も継続的な発信拠点として活用していく予定である。



展示計画をもとに必要な什器と印刷を行う



自由通路展示棚の作品設置の様子



多くの利用者が訪れる自由通路の展示棚は長期間の展示が可能でありアピールに適している

以上、2025年度の大竹手すき和紙プロジェクトの実施報告とする。